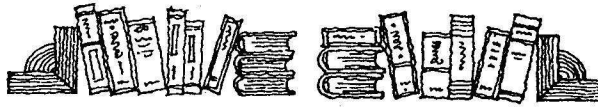


国語国文学会だより



No. 8

1992.11

国文学科卒業生の会

国語国文学会 秋季大会・公開講演会のご案内

平成四年度の秋季大会・公開講演会を、左記のように開催致します。
ご多忙のこととは存じますが、お誘い合わせのうえご出席下さいますよう、
ご案内申し上げます。なお、会員以外の方々のご来場も歓迎いたします。

日時・平成四年十一月二十八日(土) 午後一時三十分～五時
場所・本学八十年館 八五一教室

*開会の辞

*活動報告 午後一時三十分～一時四十分

*研究発表 午後一時四十分～二時四十分

(1)「井上百合子先生と夏目漱石」

石崎 公子氏

(2)「中島斌雄先生の俳句」

綾野 道江氏

*講 演 午後二時四十五分～五時

(1) 東と西の演劇 本学国文学科助教授 源 五郎氏

(2) 表現の仕事

— テレビドラマづくりを通して —

脚本家 大石 静氏

*閉会の辞

懇親会のご案内

秋季大会終了後、生協食堂に場所を移して、
先生方、在学生をまじえての懇親会を開催いたします。

会員皆様の、多数のご出席を心からお待ち致します。
おります。

時・午後五時十五分～六時三十分

場所・生協食堂(ウィミン)

会費・卒業生 三千元

在学生 千五百円

と存じます。

会員相互の交流、本学会へのご意見など、今後の
会の飛躍発展につながるような交歓の場にした
いと存じます。

尚、同封の葉書にて出欠をお知らせ下さい。

(当日、大会受付にていただきます。)

私と古典……平家物語を読む

作家 永井路子

(永井氏のご厚意により、講演の要旨をご紹介します。)

平家物語については、さまざまな解釈、読み方がされている。王朝物語である源氏物語に対し、平家物語は軍記物であり、新しい武士の時代を飾ったものとも、あの「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」という文調から、無常感の文学であり、仏教的な思想を背景に平家の滅びの美しさを書いていたものであるとか、最近では、鎮魂の文学であるなど、さまざまである。

最近、『平家物語』について書く機会(『古典の旅 平家物語』講談社刊)があり、改めて読み直してみた。大学時代に読んだ頃とは異なり、戦後の資料の読み方の深まりからみて、平家物語は、史実と違うのではないかと思える描写があり、私はそこにむしろ魅かれて読みつづけた。つまり小説とは何であろうか、歴史小説とは何だろうか。歴史的事実が書いてあれば、歴史小説と言えるかどうか。小説というのはフィクションであり、そのフィクションにこめられた意図は何であったのか、何が書きたかったのか……

私は平家物語を四人の主人公を中心に読み直してみた。

まず、平重盛。自分だけは世の中を悟り、一日も早く命を召してくれと熊野に詣で、間もなく死んでしまう。熊野詣でと、その後間もなく死んだことも事実だが、重盛は初めから将来を見通せるような人物であったのか、どうか。対照的に清盛は悪い人間として描かれている。孫の重盛の子・資盛が、時の関白と道で出会い、道をゆずれ、ゆずれぬで大騒ぎになり、資盛が辱めを受けた時、それを聞いた清盛が激怒、関白をいじめ返した、その清盛をいさめ、息子の非をただしたのは重盛だと書かれている。

ところが、当時の公家の日記によると、陰湿にいじめ抜いたのは重盛で、清盛は福原にいてこの事件に関係がない。むしろ清盛が重盛をなだめている。つまり、事実が逆転して描かれている。

それは何故だろうか。『平家』が「諸行無常の響きあり」で始まったことを重ねて考えてみると、藤原氏が四百年近く続いたのに対し、平家はわずか二十年で滅亡した。その変転を見て、人々はやはり世の中はうつろうものだと、大ショックを受けたに違いはなく、諸行

無常とは何かということを、言葉ではなく、実感として受け取ったのは、確かであろう。そうした中で、重盛をあのよう描いたのは、その戦乱に巻き込まれずに死んだ重盛に、死の救いを描きたかったのではないか。滅びの中で、滅びの凄まじさを、体験しなかった人として、重盛を描いたのではないか。

二人めが重盛の息子の維盛。彼は戦い半ばに屋島を逃げ出し、戦線離脱、妻子がいる都に帰ろうとする。その途中、かつて自分に仕え、今は出家した滝口入道に高野山で出会い、その無謀を諫められる。都へ帰れば、あなたも妻子も捕えられる、むしろここで悟りを開き、仏様におすがりしなさい。次の世に、妻子ともども、助かるためには、熊野灘に入水して、来世を願いなさいと説かれ、維盛は迷った末に熊野灘で入水する。これは、当時流行っていた補陀落渡海ではないか。来世を願う覚悟の自殺であり、絶望の末の死ではなく、再生の死である。救いだったのではないだろうか。

三人めは重衡である。清盛の末っ子。勇敢で、奈良の大仏を焼き払い、戦ううち一の谷で捕虜になり、その時になって、重衡も自分の罪の重さに気づき、悔恨にさいなまれる。重衡は法然に会わせてもらい、懺悔し、救いを求める。あなたは、それだけ悩むことで救わ

れている。仏を信じ南無阿弥陀仏を唱えていれば、極楽往生できると励ます法然の言葉に、重衡は安堵し、鎌倉での取調べにも、堂々としていたという。

ところが、これも虚構であり、法然は重衡に会える場所にはいなかったといわれる。しかし、ここで『平家』が言いたかったことは、悪人も成仏できるという根本の教えではなかったか。これは、法然から親鸞に至って、初めて説かれた思想だが、その以前から下地があったというふうに考えれば、正に、これは悪人正機への願いではないだろうか。

最後は建礼門院である。建礼門院の描かれ方は、極めて不満で、あれだけ最後に活躍する人なら、前からもう少し書きようがあったものと思えてならない。書かれていても個性も何もない描かれ方である。ところが、後白河法皇との出会いでは、弁舌さわやかに、巡礼をやったこと、子供が死んで悲嘆にくれたこと、お経を唱えることによって、救われたことを語っている。しかし、大原御幸はなかったと私は考えている。その当時の公家の日記、文治四年のある公家の日記を見ても、後白河法皇が大原に行ったとは、絶対に出てこない。『玉葉』を書いた九条兼実は、後白河法皇のやったことは何でも書いているが、ここにも出てこない。いくら忍びの御幸なりけれ

ば、と言っても、供を引き連れて行って、わからないはずがない。平家の一族が捕虜になって都へ帰ってきた時に、後白河法皇が忍びで見にいっていることも、『玉葉』は書きとめている。はなはだおちこちよいである。そういうことはすべきではない、と書いてある。それが、書いてないということは、まず、ないであろう、フィクションであろうと、私は考えている。

しかも、この灌頂の巻というのは、『平家』の専門の方によると、後から成立したそうである。そうすると、『平家』というものは、伝えられているうちに、女の人の救いも必要だということが言われてきて、女人成仏の世界を書き足したのではないか。

重盛のような、まったく手を汚さない悟りの世界、維盛のように半分は手を汚してしまっただけで、自己犠牲において悟りに近づく世界。それから、重衡のように、悪を犯した者も救われる問題。最後に女人も成仏できるかという問題。そういうことを『平家』は見事に書いているのではないだろうか。

しかも、これが、全文、フィクションであり、最後を後白河法皇と建礼門院という、平家で生き残った一人を会わせることによって、うまく完結するという形にまとめたのではないだろうか。

私はそれだけのことを書いている、『平家』の虚構というものを、軽蔑したくない。そういう書き方もあるであろう。むしろ、フィクションの部分にこそ、書きたいことがあるのではないか。書き手の方から言うと、どうしても書きたい人のところに、力が入ってしまうのはむしろ自然のことである。冷徹に歴史を記録したものではないからこそ、『平家』は物語であり、文学なのであって、登場人物の四人だけを取り挙げたが、そこに、私は『平家』が人を魅きつける源があると考えようになったのである。

つまり『平家』は、滅びの中に、救いはあるのか。そう問いかけている。『平家』は、あの戦乱の時代というものを、記憶している人々にとっては、滅びの中に救いがあったかどうか、それを求めた人々によって、その部分の物語がだんだん広がっていった、と考えられないだろうか。

そうして見ると、世の中の人々が『平家』に求めたもの、これを敏感に『平家』が受け継いで、一種の物語として語り伝えられて完成したものではないだろうか。それだからこそ、私は、『平家物語』だといいたいのである。

大石 静氏

日本女子大学国文学科卒業（新二十四回生）
一九八二年、劇団「二兎社」を結成。脚本、演出、女優の三役をこなした。昨年、退団。現在は、「ヴァンサンカン・結婚」「おとなの選択」を始め、人気テレビドラマの脚本家として活躍。本年八月にエッセイ集「わたしってブスだったの？」を刊行（現在『週刊文春』に連載中・来年四月TBSで放映予定）。
来年一月三日「家族の食卓―天使の椅子」放映予定（フジTV）

千歳船橋の改札口を出ると、待っていてくれた静さんは手を振っていました。人気脚本家大石静さんとの久しぶりの再会、高校時代とちっとも変わらない演劇大好きの彼女が、そこにいました。
二兎社での、脚本、演出、加えて女優としてエネルギーに飛びまわる熱い舞台、ちよっと過激で、それでいて人間の生き方をやさしくつつんでしまうエッセイ、そしてご存じの若い男と女、いえ年を重ねた大先輩から幼稚園の子供たちまでの、今の心の動きを緻密に描くドラマの数々、それらを生み出す力があのかわいらしい声の静さんのどこにあるのか、知りたくなるのは私だけではないでしょう。

コーヒー店での尽きない話―静さんの今までの人生と、そしてこれから切りひらいてゆく世界を、情熱を持って語ってくれました。「続けること」こそがプロになるということと説く彼女、幼稚園から大学まで日本女子大育ちの彼女にとって決して平板ではなかった脚本家への道、テレビというメディアで自己を表現することのむずかしさ等々。
「日本女子大って、卒業して、仕事をしたいと、在学していた時よりも、もっと大きく大学を感じるのよね。自分の中に。」

と静さん。日本女子大への想い――「モノカキは書いたもので勝負しなくては」の信条を貫く講演を聞いた彼女は、この学会に来てくれる理由の一つは、これだったのです。

（新二十四回生 高野 晴代記）

源 五郎氏

東京教育大学大学院修士課程修了。東京教育大学附属高等学校教諭（文部教官）大妻女子大学助教授を経て、現在日本女子大学助教授。演劇評論家。日本近代文学、特に戯曲・演劇を専攻。小山内薫をはじめ演劇に関する著作多数。演劇雑誌・新聞等の演劇評論も多く、『新潮』十一月号にも御執筆。
（植田 恭代記）

「先生がいらっしゃる所は必ずや笑いの渦となる」といわれるほど、明るい雰囲気や軽やかに運んでいらっしゃるのが源先生です。先生は近代演劇が御専門でいらっしゃいますが、「近代」という枠に捉われず、古今東西にわたっての演劇に通じておられます。さらに最近では、フェミニズム演劇にも御興味をお持ちのようです。

又、昨年一年間、ヨーロッパ諸国で様々な演劇を御覧になり、益々御研究を深めていらっしゃいます。週末は、全て観劇の御予定で埋まってしまうくらいに御多忙な先生ですが、一方では大変な食通でいらっしゃり、時には御自分でも料理を作られるとのこと。行動力と自由な感覚をお持ちの、とても魅力的な先生です。

（新三十九回生 松沼 敦子記）

井上百合子先生訃報

本学国文科名誉教授井上百合子氏が、平成四年九月十九日、お亡くなりになりました。
『葬儀・告別式は行わない。香典、献花、叙勲についても辞退する。三十五日を過ぎて公表する』とのご遺志によりここにお伝え申し上げます。

ご冥福をお祈り申し上げます。

なお、先生への追悼の思いをこめ、秋の大会に於いて石崎公子氏に『井上百合子先生と夏目漱石』の研究発表をお願い致しました。

※平成五年三月四日「井上百合子先生を偲ぶ会」を開き、追悼のひとつときをもつことを予定しております。

伝言板

本年度の会費千円未納の方は、「国語国文学会だより」（八月発行）に同封致しました払込用紙に、氏名・電話番号・回生を御記入の上、郵便局からお振込み下さい。

振替番号：東京九一九七〇七

日本女子大学国語国文学会

一九九二年十一月十日

発行・日本女子大学国語国文学会

卒業生の会